火勢に押され救助も消火も、はかどらず（1995 年 3 月号掲載・糺常寛）

平成 7 年 1 月 17 日、私は自宅 2 階寝室で妻子と共に寝ていたところ、地鳴りと激しい揺れ、家の軋む音で飛び起きた。

家族の安否を確認し、すぐ枕元に置いている携帯ラジオのスイッチを入れ、地震情報を聞く。もし、神戸地方に震度 5 の地震が発生していたら非常招集になるので、ラジオからの情報を待ったが、大阪 4、彦根 5 と言うばかりで神戸の情報は流れてこない。

神戸から離れるに従い、震度階は強くなっているので、最初は名古屋方面の地震ではないかと思っていたが、数分後に神戸市で震度 6 と流れた。その頃、市街地では想像を絶する惨状が起こっているとは夢にも思ってみなかった。

非常招集に参集するため、真っ暗な中で懐中電灯を用意し、家族にはラジオの地震情報をよく聞くように言い残して、家族の不安げな顔を後にマイカーで垂水消防署へ向かう。署までの経路は何事もなく、到着後、事務所に一歩入って、その散乱状況に驚いた。

当務員は、ほとんど管内の災害に出動しており、受付係員が現場との情報連絡に追われていた。

署で庁舎の被害状況を調査していると、長田管内で大規模な火災が発生しているとの情報が入り、非常招集した職員で 1 隊編成した。そこに「長田区の御蔵・菅原通方面へ出動せよ」との指令を受ける。

8 時、予備の小型ポンプ車に 5 名が乗車し現場へ向かう。垂水区内の被害の状況は家屋の倒壊は少なかったが、屋根瓦の落下は多く見受けた。

旧神明道路を走って須磨離宮公園交差点で渋滞、交差点を南下した途端、家屋の倒壊が多く目に入った。夢ではないかと思われる状況が拡がっており、我が目を疑った。倒壊家屋の下には多数の要救助者がいることが予想された。

現場へ向かう途中、やっと消防車が来てくれたといった表情の市民に何回も呼び止められたが、ポンプ車には救助資器材を積載しておらず、十分な救助活動もできないため、無情ではあるが長田へ向かう。

国道 2 号線を東進中、何ヶ所も黒煙の上昇を視認する。この時、神戸の消防力ではとても消火鎮圧は不可能であると思われた。

幹線道路を通ったためか菅原市場までの走行はスムーズであった。市場南側入口の消火栓に部署するが、すぐに機関員から水が出ないと報告がはいる。部署位置を 40 トンの防火水槽に変更し、放水を始めるが、火勢が強く市場内アーケードの中まで進入していた隊員に危険が迫る。

遠巻に見ている市民から「消防！何やっとるんや！！」との罵声。

菅原市場全体が炎上しているのに消火活動を行っているのは、我が隊 1 台の 2 線だけの筒先。じりじりと火勢に押されて後退を余儀なくされる。

その時、初老の男性から「家の下敷きになった者がいるから助けてくれ」と救助を求められた。アーケード内に入り倒壊家屋をくぐり、案内された場所へ行くと、おそらく就寝中であったろう寝巻姿の 70 歳くらいの女性が布団に寝たまま梁の下敷きになっていた。

意識は清明である。案内をした男性に危険だから逃げるように指示をした後、隊員と梁に肩を入れ持ち上げようとするが動かない。救助資器材があれば救出することは可能であろうが、救出器材はなく、歯がゆい思いばかりで救出は進まない。

火がすぐ傍まで迫っている。輻射熱が強く、耐えられない。このままでは我々の退路も絶たれる。仕方なくその場を離れた。菅原市場の火勢は益々拡大し、燃えるものが燃え尽き、幹線道路で焼け止まった。

その後も現場から現場へと転戦し、1 月 17 日から 23 日までの 7 日間は日替わりの感覚が全く無く、数時間の仮眠以外は、ただ活動に従事していたのみである。

1 ヶ月を経て落着きを取り戻してみると、菅原のおばあちゃんのことが昨日のように頭に浮かび、夜、目が覚めても思い出す。

消防を使命として奉職してきたが、あの時ほど消防の無力を感じたことはない。就寝中不意に襲った直下型の大地震。逃げる間もなく犠牲になった多くの市民のご冥福をお祈りする次第である。